

『消滅都市』

第十話『決断』

決定稿

脚本・入江信吾

《登場人物》

タクヤ

ユキ

ギーク

ユミコ

コウタ

エイジ

キキョウ

スズナ

カイバラ

元探偵事務所所長

ツキ

タイヨウ

ラクーナ研究所広報担当
同所長

柿崎ユウジ

刑事

日高ケイゴ

私立探偵・元刑事

ヨシアキ（台詞なし）

奇術師

主婦

青果店主

高校生男女

幼い姉弟

○ビジネスホテル・表

○同・一室

薄暗く狭い部屋。

隅でユキがうずくまっている。

ユキ「……」

× × ×

フラッシュ、#08より。

自らの手でソウマを葬ったユキ。

× × ×

ユキ「……」

テーブルに並んだ二つのチョコレート。

○オープニング

○ガレージ

暗幕を張り、閉め切ったガレージ内。

ギークが暗い顔でPCを見ている。

ネットの掲示板。

『ヨシアキ売名乙』

『ラクーナにケンカ売るとかバカじゃないの』

『それより例の発光体騒ぎは何だったんだ？』

『鼻眼鏡の住所特定まだ？』等々。

ギーク「一番恐いのは、世間だ……」

○公園

ベンチでヨシアキがうなだれている。

○日高探偵事務所・中

ソファに広げられた新聞。

一面の見出し、『ラクーナケミカル 疑惑を全面否定 訴訟問題に発展か』とある。

デスクに飲みかけのウイスキーのグラス。

ケイゴが突っ伏して寝ている。

そこへ私服のユウジが入ってくる。

ケイゴ「……？」

ユウジ「約束通り、雇ってくださいませんか。最低時給でいいんで」

ケイゴ「仕事なんかねえぞ」

○道路

『ミミズク運輸』のトラック（移動式ラボ）が他の大型トラックに紛れ、沿道に停まっている。

○移動式ラボ・中

止まり木で目を閉じているミミズク。壁の両端に紐が渡され、洗濯物が吊されている。

ソファに無精髭のエイジ。

後部扉からキキョウが入ってきて、キキョウ「これからどうするの？」

○エイジの自宅・俯瞰

周囲を含め、ソウマ禍により自宅はほぼ全壊している。

エイジ（オフ）「しばらくは車上生活だな」

○移動式ラボ・中

エイジ「これも当然の報いか」

キキョウ「……」

エイジ「二人には本当のことを話そうと思う」
キキョウ「私も……同じことを思ってた」

○ビジネスホテル・一室

窓辺でユキがぼんやりと景色を見ている。公園の狭い砂浜が見える。

タクヤが来ており、

タクヤ「俺はいつでもロストへ向かう準備は出来てる。気持ちが固まったら言ってくれ」

ユキ「……」

タクヤ、コンビニの袋をテーブルに置き、

タクヤ「ちゃんと食つとくんだぞ」

ユキ「……ごめんなさい」

タクヤ「だから『ありがとう』だろ」

出ていくタクヤ。

ユキ「……」

ユキ、チョーカーを手に取り、首に装着

する。

ソウマの分の飾りも重ねて付いている。
一つ頷き、決意の表情。

○道路

スクーターを駆るタクヤ。

○廃ビル・表

封鎖地区内の廃ビル。

○同・一室

カイバラ探偵事務所のアジト。
ソファにタクヤ。

足元に落ちている古い包帯。

上半身裸のコウタの腹部に、ユミコが包帯を巻き直している。

ユミコ「はい、オッケー」

と背中をぴしゃりと叩く。

コウタ「いてっ。まるであん時の先輩だ。随分昔に感じるよ」

タクヤ「お前、あの状況でよく無事だったな」

× × ×

フラッシュ、#2より。

壁にもたれたまま血まみれで力尽きているコウタ。

× × ×

タクヤ「ユミコは知ってたのか？」

ユミコ「まさか。私だって驚いたわよ」

タクヤ「誰に助けられたんだ」

コウタ「いや、まあ誰っつーか」

タクヤ「？」

ユミコ「(タクヤを案じ)……」

タクヤ「何だ。早く言え」

コウタ「実は……」

○地下鉄・線路C（コウタの回想）

力尽きたコウタの前に来て止まる足。

カイバラだった。

コウタ（オフ）「カイバラさんなんです」

タクヤ（オフ）「何だっつー？」

○廃ビル・一室

タクヤ「あの男は組織に寝返った。事務所ごとな。組織を抜けたユミコやお前を助ける理由はないはずだ」

コウタ「寝返った？ 本気でそう思ってるんすか？」

タクヤ「じゃあ何で俺の潜入調査を打ち切った。あの時学園の闇を暴いていれば、子供たちは助かったかも知れないんだ」

コウタ「先輩の気持ちも分かりますけど……俺、あれから独自に調べたんすよ」

ユミコ「(たしなめ) コウタ」

コウタ「この際言わせて下さい。カイバラさんは組織に脅されてた。従わなければ事務所メンバーを皆殺しにする、って」

タクヤ「！」

コウタ「俺たちのために信念を曲げざるを得なかった。一番悔しかったのはあの人ですよ」

タクヤ「(ショックで)……」

コウタ「なんか食うモン探してきます」

気を遣ってか、場を離れるコウタ。
タクヤ「……」

○ホテル・一室

ユキのもとへキキヨウが来ている。
買い物袋をユキに渡し、

キキヨウ「下着とか色々入ってる。さすがにこういうのはタクヤ君じゃあね」

ユキ「ありがとう……それで話って」

キキヨウ、ソファに座り、
キキヨウ「ロストについて、私の知り得る限りを伝えようと思って」

ユキ「？」

キキヨウ「ロストは、まだ終わってないの」
ユキ「……どうということ？」

○ラクーナケミカル社・屋上

巨大なパラボラアンテナ装置がある。

柵の前で景色を見ているタイヨウ。
傍にはツキとスズナ。

眼下にはロストと封鎖地域が広がる。

ツキ「本来なら、あの穴が繋がっていればノ
ア計画は成功してたのよね」

タイヨウ「……」

ツキ「忌々しいわ、本当に」

タイヨウ「だが今もなお膨張を続けているの
は事実だ。それはつまり……」

○ホテル・一室

キキョウ、ノートPCの画面を見せる。

ロストと封鎖地域の俯瞰図。

キキョウ「ロスト発生時のエネルギー量から
考えると、これくらいの規模になっていて
もおかしくはなかった」

ロストの穴が東京をすっぽり覆っている。

ユキ「こんなに……!」

キキョウ「だから終わってないって言うより
は、極めてゆっくりと完成しつつある、と
言った方がいいかしら」

ユキ「……」

キキョウ「もちろん世界規模で向き合ってい
かなきゃいけない問題だけど……早くても
数十年後の話よ。今差し迫った危機ってわ
けじゃないわ」

○ラクーナケミカル社・屋上

ツキ「ダイチがロストの内部にいる?」

タイヨウ、ロストの穴を眺めつつ、

タイヨウ「そうとしか考えられない。奴が何
らかの方法で膨張を食い止めているはずだ」
スズナ、アンテナを見上げ、

スズナ「ロストの内部へは何度も通信を試み
ていますか……」

タイヨウ「一度だけ内部からの送信を傍受し
たことがあっただろう。予め量子暗号の鍵
を渡された者にしか解読できないがな」

ツキ「それがダイチからだと言うの?」

タイヨウ「ああ。ユキがロストへ向かおうと

しているのも何らかのメッセージを受け取ったからだろう」

ツキ「ということは……」

タイヨウ「ダイチさえ排除すれば、ポータルは完成する」

○ホテル・一室

ユキ「何十年先の話だとしても、あの穴がいずれ全部呑み込んでしまうでしょ？　なおさら私が行かなきゃ」

キキョウ「あなたが行ったところでどうにかなるとは思えない」

ユキ「でもお父さんからのメッセージが」

キキョウ「敵はソウマさえ利用するような奴らよ。メッセージ自体が罠かも知れない」

ユキ「それでも私は……！」

キキョウ「じゃあはつきり言うわ。ロストの本当の危険性について」

ユキ「……？」

○河川敷

タクヤとエイジが立っている。

タクヤ「俺との契約を解除するだろ？」

エイジ「ああ」

タクヤ「今さら何を言い出すんだ。ユキをロストへ送り届けるんじゃないのか」

エイジ「君には言っていなかったことがある」

○ラクーナケミカル社・屋上

ツキ「ダイチを排除するといっても、一体どうやって……」

タイヨウ「私自らロストへ向かう」

ツキ「えっ？」

スズナ「！」

ツキ「正気なの？　波動性物質の危険性はあなたが一番分かっているでしょう？」

タイヨウ「その影響を受けないようにする、そのための実験をこれまで続けてきた」

ツキ「クスリは未完成よ。生身の人間がロストへ踏み込んだりしたら……」

○河川敷

タクヤ「何だその波動性物質というのは」
エイジ「ロスト内部に充滿しているとされる
未知の物質だ。あらゆる物体を貫通し、深
刻な影響を与える。特に生物の神経系に及
ぼす影響は甚大だ。長時間晒されると脳内
の海馬が侵食され……記憶が失われる」
タクヤ「……」
エイジ「最悪の場合……」

○ホテル・一室

キキョウ「精神に異常を来し、死に至ること
もあるわ」
ユキ「！」

○河川敷

タクヤ「……」
エイジ「これまでロストへの調査隊が誰も生
還しなかったのはそのせいだろう」
タクヤ「それを知っていて俺とユキをロスト
へ行かせようとしていたのか？」
エイジ「……ああ。だがこれ以上、君たちを
危険に晒すわけにはいかない。身勝手だと
思うだろうが、それが本心だ」

○ホテル・一室

キキョウ「だからユキ、お願い。行かないで」
ユキ「……」

○河川敷

タクヤ「あんたの気持ちは分かった」
決意は変わらない様子のタクヤ。
エイジ、もどかしげな様子で、
エイジ「……ラクーナの所長、タイヨウが動
き出している」
タクヤ「タイヨウ……」

× × ×

フラッシュ、#8より。

任意同行に応じ、悠然と歩くタイヨウ。

× × ×
タクヤ「あいつか……」

エイジ「ロストの内部と交信を試みているらしい。君たちが向かえば排除してくるに違いない。危険な男だ。考え直してくれ、タクヤ君」

タクヤ「……」

○ラクーナケミカル社・屋上

ツキ「今になってあの出来損ないの穴が意味を持つてくるなんて……」

タイヨウ「ユキを泳がせ、覚醒させる。あるいはソウマを暴走させる。それで十分ポータル装置の代わりになると考えていた。だが……」

スズナ「……」

タイヨウ「結局のところ、ダイチとはケリを付けねばならないということだ。あの裏切り者と」

○ホテル・表（夜）

タクヤがスクーターで来て停まる。

タクヤ「（部屋を見上げ）……」

○同・一室（夜）

ユキが一人、ソファで深刻な顔。

○同・表（夜）

タクヤ、再びどこかへ走り去っていく。

○ガレージ・表（夜）

タクヤのスクーターが置いてある。

中からギークの声が聞こえる。

ギークの声「ここ！ ほら見て！」

○同・中（夜）

タクヤとギークが床にあぐらを掻き、S
PR5のライブDVDを観ている。

シートの上にはポテチや天むす、割り箸。
ギーク「今のユアさんの動き！ 分かった？」

タクヤ「いや……」

ギーク「もう。ちゃんと見ててよ」

と、巻き戻す。

ギーク「ここ！ 他のメンバーがセンターに戻ってくるのがワntenポ遅れちゃったの、普通ならここで変な間が空いちやうでしょ？ でもユアたんがアドリブのダンスで切り抜けたんだ」

タクヤ「へえ」

ギーク「凄くない？ 腹黒とか色々言われているけど、実は誰よりも努力家だし周りを見てるんだよ、ユアたんは」

タクヤ「なるほどな」

ギーク「あ、お腹空いたら天むすとポテチ食べればいいからね」

タクヤ「お前いつもこの組み合わせだな」

ギーク「一緒に食べたら最高なんだって。ほら、タクヤもやってみて」

と、ポテチを渡す。

タクヤ、ポテチをかじる。

ギーク「はい、ここで天むす投入！」

タクヤ「一緒にだってそういう意味かよ」

ギーク「いいから！」

と、無理矢理天むすを食べさせる。

ギーク「ほら来た！ いま口の中天国でしょ？ パリパリとジュワのコーボ！」

タクヤ「あ、ああ……」

ギーク「あ、ユアたんのソロ曲だ！ 歌詞が最ッ高なんだよねこれ」

ギークがテレビに見入っている間、自分から天むすとポテチを同時に食べてみるタクヤ。

そんなタクヤを横目に見て、ギーク「……」

○同・表（夜）

スクーターに跨がるタクヤ。

ギークが見送りに出ている。

タクヤ「邪魔したな」

ギーク「（何やら違和感）ううん」

タクヤ「(やや振り返り) ギーク」
ギーク「？」

タクヤ「天むすとポテチって意外と合うんだな」

ギーク「(強い違和感)……」

タクヤ「じゃあな」

と走り出そうとするが、

ギーク「ちょっと待ってて！」

とガレージに戻り、ダッシュで戻ってくる。

ギーク「これ！ 貸すよ！」

と、SPR5のライブDVDを渡す。

タクヤ「さっき散々見ただろ」

ギーク「何度見ても最高だから」

タクヤ「……」

受け取るタクヤ。

ギーク「絶対、返してね！ お宝なんだから」

タクヤ「……おう」

去っていくタクヤ。

いつまでも見送っているギーク。

○中CM

○砂浜(朝)

波が朝日に煌めいている。

○ホテル・廊下

部屋の前で逡巡しているタクヤ。

思い切ってノックをする。

ユキの声「はい」

○同・一室

身支度を済ませているユキ。

ドア付近に立っているタクヤ。

タクヤ「よく眠れたか？」

ユキ「ええ」

タクヤ「そうか。カビ臭い部屋だが、景色はいい」

と、窓辺に向かい、窓外を見やる。

タクヤ「海が見えるな」

ユキ「ええ」

タクヤ「良い天気だ」

ユキ「そうね」

タクヤ「……」

ユキ「……」

タクヤ「ユキは」

ユキ「？」

タクヤ「普通の生活に戻ったら、まず何がしたい」

ユキ「どうしたの急に」

タクヤ「いや……」

ユキ「普通の生活、か。まだ考える余裕ないかな。色々あり過ぎたから」

タクヤ「そうだな……」

ユキ「……」

タクヤ、ユキの顔をちらりと見て、

タクヤ「……いまスクーターの調子が悪くな。ちよつと時間をくれないか」

ユキ「えっ……あ、うん……分かった」

タクヤ「それじゃ」

出ていくタクヤ。

ユキ「……」

○移動式ラボ・中

エイジにギークが詰め寄るのを、コウタが羽交い締めで抑えている。

見ているばかりのユミコとキキョウ。

ギーク「どういふことだよ！ 初めからタク

ヤは実験台だったのかよ！」

コウタ「落ち着け！」

ギーク「それじゃ組織のやってることと変わらないじゃないか！」

エイジ「……そうだな」

キキョウ「これくらい言わなきゃ、あの二人は思い留まってくれないから」

ギーク「そもそも焚き付けたのはあんたたちだろ！」

ユミコ「(たしなめ) ギーク」

ギーク「……ッ！」

軽いため息のエイジとキキョウ。

ユミコ「ただ……言い方はマズかったわね」
キキヨウ「どうして」

ユミコ「そんな止め方されても、二人が余計
苦しいだけじゃない」

キキヨウ「じゃあどうすれば良かったの」
ユミコ「……」

○スクーターを駆るタクヤ

○物思いに耽るユキ

○移動式ラボ・中

重苦しい沈黙が場を包む。

エイジ「どんな形であれ、彼らが二人で出した結論なら……」

一同「……」

○ラクーナケミカル社・実験室

減圧室のような波動性物質発生装置内。

検査着姿の被験者1が必死の形相でガラスを叩いている。

被験者1、やがて力尽き、倒れる。

操作端末の前に座っているタイヨウ。

傍にはツキとスズナ。

タイヨウ「やはりこのラインが限界か」

医師1が実験済みの被験者2を診断している。

被験者2は記憶を失ったのか、刺激に無反応でぼんやりしている。

ツキ「波動性物質阻害薬の成分バランス……

理論上はこれで正しいはずだけど、何か決定的な因子が足りないのよね」

タイヨウ「もっと被検体を用意しろ」

スズナ「ですがこれ以上は……」

タイヨウ「ポータルさえ繋がれば組織なども

はやどうでもいい。急げ」

スズナ「はい……」

ツキ「……」

タイヨウ「(昏い目で)……」

○街

雑踏の中、一人歩いているユキ。

人目を避け、帽子を目深に被っている。

店先で談笑している青果店主と主婦。

青果店主「ほら、昨日テレビでやってたでしょ。キャベツ」

主婦「お肌にいいって？」

青果店主「あ、お客さん必要ないか」

主婦「あらやだ。お一つ下さる？」

青果店主「毎度！」

自転車の二人乗りで通り過ぎていく高校生カップル。

男子高生「どうだった？ テスト」

女子高生「英語ヤバかった」

男子高生「俺も。世界史も数学も国語も全部ヤバイ」

女子高生「ダメじゃん」

親に連れられ、歩く幼い姉弟。

少年「姉ちゃんばつかズルいよ。僕もピアノ習いたい」

少女「あんた音感ないから無理」

少年「お前ブスだから無理」

少女が少年を小突く。

少女「お母さん、こいつ最低」

何気ない日常に浸るユキ。

立ち止まり、俯く。

が、やがて決意の表情に。

ユキ「……」

○街

コウタがスマホで通話中。

コウタ（電話）「いや、だから何で俺が……自分で直接言えばいいじゃないですか。つかトマトって何スか？」

一方的に電話が切られる。

コウタ「ユミコさん？ もー、めんどくせーな……」

コウタ、どこかへ掛け直し、

コウタ（電話）「あー、先輩っスか？」

○車道

タクヤが脇にスクーターを止め、スマホで通話中。

タクヤ（電話）「どうした」

コウタの声「いまヒマでしょ？ ヒマですよ？ ちょっとトマト買ってきてくれます？」

タクヤ（電話）「は？」

○街

コウタ（電話）「いや、ユミコさんがペスカトーレ作るって張り切ってるんすよ。素材にこだわりたいからって、えっと何トマトだっけなー、その品種じゃなきゃダメだっかって」

○車道

タクヤ（電話）「あいつが料理してるとこなんて見たことないぞ」

コウタの声「場所はメールで送っとくんで、

つーわけで、よろしくです」

通話が切れる。

タクヤ「何なんだ……」

○移動式ラボ・中

エイジとキキョウが紅茶を飲んでいる。

エイジ「最近、よく思い出すんだ。ラボにいた頃のことを」

キキョウ「あの頃は……自分たちが最先端の研究をしてるって自負があったわ。充実してた」

エイジ「私もだ。科学者としてあれほど恵まれた環境はなかった。何しろダイチさんという天才がいたからな」

キキョウ「ちょっと変わってたけど、家族思いの人だったわね。口を開けばユキとソウマの話ばかり」

エイジ「親バカとも言おう」

フフツと笑い合う二人。

エイジ「ただ……」

キキョウ「？」

エイジ「ダイチさんは自分の研究について本当はどう思っていたんだろう」

× × ×

フラッシュ、#9より。

ダイチ「エイジ君。毒にも薬にもなるのが科学というものだ」

× × ×

エイジ「……」

壁に貼ってある新聞記事を見るエイジ。

ロスト関連の記事（#1参照）。

エイジ「ロストが発生した原因の一端は私たちにもある。その責任と向き合わなければならない」

キキョウ「……言うのは簡単よ。覚悟はあるの？」

エイジ「ああ……科学者である前に人間でありたいからな」

○海沿いの車道

——をスクーターで疾走するタクヤ。

○喫茶店・表

○同・中

テーブルにパフェが二つ。

対座しているのはユキとユミコ。

ユミコ「こういうの、久しぶりでしょ」

ユキ「でも私……」

ユミコ「たまには息抜きも必要よ」

ユキ「……」

○農場付近の道

沿道にビニールハウスが並んでいる。

タクヤがスクーターから降り、近くのベンチに座る。

タクヤ「ふう……」

そこへ一人の農夫が来て隣に座る。

農夫「よっころしよ」

タクヤ「？」

農夫はカイバラだった。

タクヤ「カイバラさん……！」

カイバラ「よお」

タクヤ「こんなところで何を」

カイバラ「トマト食うか？」

タクヤ「……？」

○ビニールハウス内

整然と並ぶトマトの苗。

カイバラがじょうろで水をあげていく。

見ているタクヤ。

タクヤ「水、少ないですか」

カイバラ「そう思うだろ？ 俺も最初はたっ

ぷり水やってたんだが……食ってもイマイ

ち美味くないんだよ。植物の生きようって

力を逆に奪ってたのかもな」

タクヤ「……」

カイバラ「これくらいがたくましく育つんだ」

タクヤ「……」

× × ×

カイバラ「ほれ」

と、もいだトマトをタクヤに手渡す。

タクヤ、トマトをかじる。

カイバラ「美味いだろ」

タクヤ「（美味い）……」

○喫茶店・中

テーブルに食べ終えたパフェのグラス。

ユキ「やっぱりタクヤは知ってたんだ、波動

性物質のこと」

ユミコ「ええ」

ユキ「……そうだと思った」

店内のざわめき。

グラスの氷。

ユミコ「もう決まってるんでしょ？」

ユキ「……」

ユミコ「パフェ、お替わりしちやおっか」

ユキ「え？」

ユミコ「半分コしよ」

ユキ「（微笑）……うん」

○農場付近の道

スクーターに跨がるタクヤ。
後部シートには段ボール箱いっぱい
のト
マト。

カイバラ「そんだけあればユミコが何回失敗
してもイけるだろ」

タクヤ「……ありがとうございます」

エンジンがかかるタクヤ。

カイバラ「タクヤ」

タクヤ「？」

カイバラ「後悔だけはするなよ」

タクヤ「……はい」

走り去るタクヤ。

その表情に迷いはなく――。

○街を走るユキ

同じく迷いのない表情。

○ラクーナケミカル社・実験室

波動性物質発生装置の傍、被験者のみな
らず白衣の医師らの死体まで並んでいる。

ツキ「もうやめましょう、タイヨウ」

タイヨウ「やっと分かったぞ……」

ツキ「え？」

タイヨウ「阻害薬の成分バランスはこれで間
違いない。あと一つ足りない因子……それ
は私自身の存在だ」

ツキ「どういうこと？」

タイヨウ「ロストは我々がいた並行世界と繋
がりにかけている。元々あちらにいた我々な
らば記憶を保ったまま存在可能なのではな
いか？ ロストの中に意思を持ったダイチ
がいるのもその証拠だ」

ツキ「それじゃあまりにも根拠が薄いわ」

タイヨウ、立ち上がり、背を向ける。

タイヨウ「この仮説を立証さえ出来れば……」

ツキ「……」

じっとその背中を見るツキ。

ツキ「……私が実験台になるわ」

タイヨウ「(振り向き)」

ツキ「同じ条件で検証できるのは私しかないでしょ」

タイヨウ「いいのか？」

ツキ「……」

ツキ、切ない目でタイヨウに抱きつく。

ツキ「大丈夫よ。私はあなたのことを忘れたりはしない」

タイヨウ「ツキ……」

× × ×

アンブルを自らの腕に打ち込み、装置内に入るツキ。

ツキ「いいわ」

タイヨウ、端末を操作する。

これまでの設定値まで濃度を上げていく。
ガラスの向こうのツキ、苦しそう。

端末画面、設定値をクリアしたとの表示。

タイヨウ「ほう」

ツキ「タイヨウ……ほら……私、あなたのこと、ちゃんと覚えているわ！」

タイヨウ「素晴らしい成果だよ、ツキ。念のためにも最大値でも試してみよう」

ツキ「え……？」

タイヨウ、端末で設定値を最大にする。

ツキの体がぐにやぐにやになったように見える。

冷淡に端末でツキの意識レベルをモニターリングするタイヨウ。

ツキが激しくガラスを叩く音。

ツキの声「出してよ！ ねえ！ どうして……ねえ……」

やがて声が止み、どさりと倒れる音が。
タイヨウ「とりあえず、仮説は立証できた」
静かな狂気をたたえるその目。

○砂浜（夕）

寄せては返す波。

ユキが座って水平線を眺めている。

そこへ砂を踏む足音。

タクヤがやって来た。

タクヤ「食うか？」

と、トマトを差し出す。

ユキ「え？」

タクヤ「ヘンなおっさんからもらった。美味いぞ」

受け取るユキ。

しばらく黙って海を見る二人。

ユキ「海ってこんな広かったっけ」

タクヤ「……」

ユキ「私たちがちっぽけなのかな」

タクヤ「そうだな。ちまちま悩んでんのがバからしくなる」

ユキ「……ねえ」

タクヤ「ん？」

ユキ「タクヤの思う普通の生活って？」

タクヤ「それは……住む家があって、仕事があって、少しの友人がいて……」

ユキ「普通だね」

タクヤ「普通が一番幸せなんだ」

ユキ「そっか、そうだね。全部終わったら……」

…普通の生活がしたいな」

タクヤ「（見て）……」

ユキ「住むならどこがいいかな」

タクヤ「景色のいいところだろう」

ユキ「海の見えるお家。猫も飼いたいな」

タクヤ「窓は大きい方がいい。猫も喜ぶ」

ユキ「カーテンは何色がいいかな」

タクヤ「青だな」

ユキ「えー、青いカーテン開けて青い海見るの？」

タクヤ「ああそうか。じゃあ緑」

ユキ「いいね。家具もそれに合わせて。オシヤレなお家に住むのが夢なの」

タクヤ「俺もたまに遊びに行くよ」

ユキ「ご飯作ってあげる」

タクヤ「コーヒーにパンがあれば十分だ」

ユキ「何言ってるの、白米と味噌汁に決まってるじゃない」

タクヤ「和食派だったのか」

ユキ「ふふ。幸せだろうね、普通の生活」

タクヤ「ああ」

ユキ「忘れないようにしなきゃ」

タクヤ「ああ。これから先、何があっても…

…忘れないようにしよう。幸せな生活を」

ユキ「ええ。幸せな生活を」

と、トマトをかじる。

ユキ「美味しい」

タクヤ「だろ？」

夕日にキラキラと輝く海。

○ホテル・表（日替わり）

ユキが待っている。

スクーターのタクヤがやって来る。

タクヤ「待たせたな」

ユキ「じゃあよろしくね」

後部シートに跨がるユキ。

タクヤの腰をしっかりと掴む（#1と同じ構図で）。

タクヤ「しっかり掴まってるよ」

ユキ「ええ」

タクヤ「行くぞ！」

スロットルを回すタクヤ。

ロストを指し、走り出す二人で――。

〈つづく〉

二〇〇字換算 79枚